

<特集 巻頭言>

「夜、うつくしい魂は涕(な)いて」―見えないものへの視線

石倉和佳

たましいが泣くことはない、と思っていた。中原中也を読んだ時には。その声の人は「もう死んだっていいよ」というのである。その声は、「湿った野原の黒い土、短い草の上」を吹き流れて行った。言葉は消えてしまうので、孤独に病んでいくのか。けれどもあまたの本の中には、古い時代の人々が高みにある見えないものに祈ったことを書き留めているものがある。何かの力を感じて命までささげた人がいる。人間にこの世における確かな足場を与えるために、そうした祈りには形が与えられていった。そしてエフュージョン(effusion)にのって、全世界を一つにする大いなるたましいは、地中海のほとりから新大陸アメリカまで時代を超えて伝え継がれていったのである。そしてその大いなるものは、いまでも人一人の涙との共鳴をやめない……。そこまで考えめぐると、夜すすり泣く「うつくしい魂」は、一度も名づけられなかった何かに恋焦がれている熱なのだと気づく。それが手に入らないことに気が狂いそうになっている熱の塊である。そうした名づけられない何かへの視線は、しかし学術が新しくなる時にひときわ強くなるものだろう。

かつてトマス・クーンがパラダイム・シフトを唱えたとき、それが構造転換の話だと理解されていたのだかどうか。一つの学術領域にはそれを学術として成り立たせる構造物があって、それらが機能不全に陥ると全く別な視点から構築されたものにとってかわられる。古いパラダイムの信奉者は死ぬまでその信仰をやめないが、めでたくそれらの人々が死に絶えたころには、新しいはずのパラダイムの構造物にはすでに年季が入っていることも珍しくない。知っておきたいのは、たましいはパラダイムの構造建材とはならないことである。それは種であり、生成する原理であり、生きるか死ぬのかの運命の手綱を引くものとなる。自分が属するパラダイムの構造ばかりを点検している学術家にとっては、たましいは科学の対象ではないし、ことばにもならないし、そもそもあるとは思っていないので、それについて泣きもしないし冗談も言わな

い。こんな退屈な学術を愛でるために幾多の富が流れ去ったと嘆く前に、たましいについて思いを巡らす日があることを喜ぶ方が良いのだけれども。

記者は記する者なり、と言った人がある。文字にして彫り付けて残す、ということである。その言い方をなぞれば、詩人も記する者であり、研究者も記する者である。もしも言葉にして残さなければずっと誰にも語られない何かを、今書くことの意味を確認しながら人は文字として綴るのだろう。もしそうでなければ、書いている意味などないのだろう。この事実は、どのような言葉が伝わり、どのような言葉は芥と消える運命であるかを知らせるものでもある。そして言葉は、人々の間に根を張ることを育む時間の中で、読まれることでその命をつないでいくのである。

かつて地球が丸いとは思われてはいなかった太古から、世界の四隅には四人の天使がラッパをもって立っていた。四人の天使たちは吹き荒れる四つの風を捕まえて地上を荒らさないように守っていたのである。しかし今こそ音が天空を満たすのだと風が天へと駆けあがるとき、丸い地球の上で詩人は歌う。「天使たちよラッパを吹き鳴らせ、死から立ち上り沸き上がるのだ、限りなく無限のたましいたちよ、散り散りになった肉体へと向かって行け」。そう、やっと住むべき場所へと帰っていく。そう、肉体はたましいの家である。今回、「たましい」をテーマとして編集した『カルチュラル・グリーン』が何の家であるのか、研究会を開いても語ることもないが、この小さな冊子で繰り広げられる論考のすべては、少なくとも小さな家を得たと思って、それとは気づかれない熱をはらんで読まれることを待っている。

引用 中原中也「妹よ」『山羊の歌』(1934)収録

John Donne, “Holy Sonnet”

At the round Earths Imagin'd corners blowe

Your Trumpetts, Angells, and arise, arise

From Death you numberles Infinities

Of soules, and to your scattered bodies goe . . . (8 in Original Sequence, ll.1-4)

From *The Variorum Edition of the Poetry of John Donne*, vol.7 part 1, 8.